

バラつきがあるが、全体的に壺内のものより長い。

(4)～(6)は壺内に入れられていた人形で、三人の名前が書かれている。(4)の伊勢宗子が六枚以上、(5)の秦奈良子が一七枚以上、(6)の伴廣富が一三枚以上あり、秦奈良子と伊勢宗子が表裏に書かれているものが一点ある。(3)のタイプに比べて短く、頭部は角を切り取つており、顔の表現は女性と考えられる。

これらの人形は、同一名の人形ごとに筆跡が同じと判断され、材には木簡を利用したものや、檜皮を用いたものも認められる。

今回出土した人形は縛られたり、木釘が打たれたりしているが、これはあくまで束ねるための行為とみられる。これらの人は、祓もしくは病気平癒に使用され、その後一括してこの井戸に廃棄されたものであろう。その時祭祀の主たる戸主と家人とで廃棄のされ方が区別されたとも考えられる。

なお墨書のある石は、珪岩の亜角礫の表面や節理面に、「嘉祥」「□／元年」「□□」及び「□□□／□□□」「□」(上面)と書いたものである。上から一三段目から出土。

积読については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室のご教示を得た。
(松浦五輪美・原田香織)

奈良・旧大乘院庭園

きゅうだいじょういんていえん

1 所在地 奈良市高畠町

2 調査期間 第三一〇次調査 二〇〇〇年(平12) 一月～三月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 田辺征夫
5 遺跡の種類 庭園跡
6 遺跡の年代 古代～近代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡左京四条七坊東端にあたる。奈良時代には元興寺の敷地で、同十三～十五坪は元興寺禪定院の故地と推定されている。一方興福寺の門跡寺院

大乗院は、寛治二年(1088)に創建、平重衡の南都焼き討ち罹災後、元興寺



(奈良)

禪定院の跡地に移転する。旧大乘院庭園は、禪定院の時期に遡る可能性もある。庭園で、中世に整備されその様子は尋尊の「大乘院寺

社雑事記」に詳しい。当研究所では財日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乗院庭園保存修理事業」の一環として、一九九五年以来継続して発掘調査を実施している。

今年度の調査は、入江や岬を含む園池（東大池）西岸中央部周辺に設けた三つの調査区で行なった。調査面積は計約六〇〇m²である。

調査の結果、西小池（中世に東大池の西側に新たに掘られた池で、近世にさらに南に拡張）・岬・石敷池底・池岸・石組護岸・石組遺構・溝・井戸などを検出した。遺物には、木簡の他、大乗院以前の元興寺禪定院に関わるとみられる白鳳期の瓦、中近世の土師器・瓦器があり、古代に遡る井戸からは斎串が出土している。

木簡は東西溝SD七六三〇から一点出土した。この溝は西小池の南で検出した断面逆台形の素掘りの東西溝で、当初東大池から西側へ排水溝として掘削されたが、ある時期に溝半ばの深さまで青灰粘土で埋め戻され、池の一部に取り込まれた。その上層には近現代の建築廃材が多量に含まれており、最終的な廢絶は現代の整地が行なわれた段階にまで降ると考えられる。木簡は池の一部に取り込まれた段階で混入したとみられる状態で出土した。なお、この溝は江戸時代の隆温の「大乗院四季真景図」にも描き込まれており、その写実性が発掘調査によつて実証されたことになる。この他、SD七六三〇につながる南北溝から出土した木片にも墨かとみられる模様があるが、文字とは認識できなかつたので報告は割愛する。

8 木簡の釈文・内容

(1) . □□□
□□

130×42×6 061

両面に大振りの文字が記されているが、判読できない。仮に字数の確定できる方を表面とした。近世の箱物に二次的に墨書きしたもの断片であろう。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報』一〇〇〇一
同『平城宮発掘調査出土木簡概報』三五（一〇〇〇年）

（渡辺晃宏）